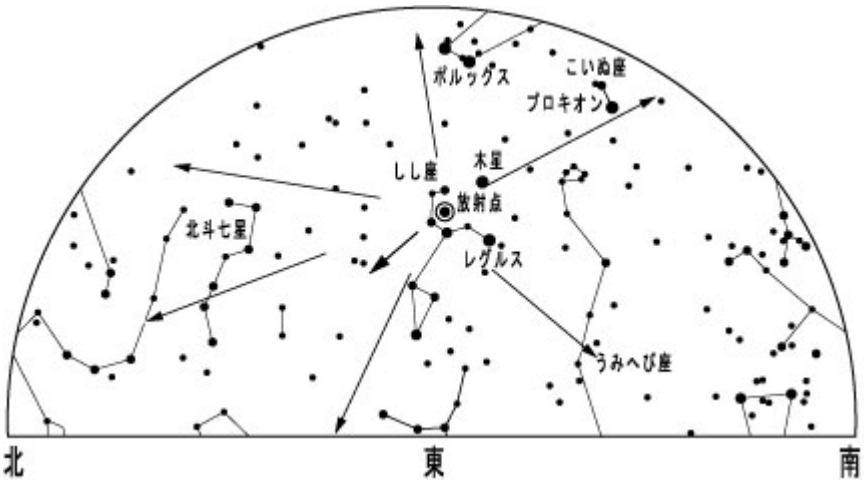
天文ニュース(No.179)

しし座流星群　2002年10月20日発行

昨年、多くの流れ星が見られたしし座流星群の季節がやってきました。
しし座流星群は、毎年11月17日から19日の明け方にかけて多く見られる流星群で、特に33年ごとに活発に活動することでも知られています。
流星は、宇宙にただよう小さな砂つぶのようなチリが地球に飛びこんで、地球の大気とまさつして光る現象です。
このチリは、おもに彗星（すいせい、別名ほうき星）から出てきたものです。
決まった時期にまとまった数の流星が、空のある1点（放射点）から、空全体に飛び出すように見えるものを流星群といいます。
流星群の名前は、放射点のある星座の名前がつけられています。しし座流星群は、しし座の頭の付近に放射点をもつ流星群です。
しし座流星群は、テンペル・タットル彗星の軌道上に残った微粒子が地球と衝突するために見られます。

テンペル・タットル彗星は、太陽のまわりを33.2年で公転しており、1998年2月に太陽に最も近づき、しだいに太陽や地球から離れています。
このため今年のしし座流星群の活動は、あまり活発ではないと考えられますが、1999年、2000年、そして昨年（2001年）の活動ピークの時刻を 正確に予報したイギリスのデビッド・アッシャー博士のダスト・トレイル・モデルに基づくと、今年の大出現の時刻は、日本時刻で19日の13時頃 と19時半頃の2回あり、その時刻には1時間にそれぞれ数千個と予想されています。
この時刻は、日本ではお昼間であることやしし座が地平線の上に昇っていない時刻です。
大出現が眺められる地域としては、ヨーロッパ西部・アフリカ北西部、アメリカ中西部が考えられます。
しかし今年は、月明かり（20日が満月）の妨害があるために、どの程度の流星が見られるか観測しないと分かりません。
日本では、例年どおり1時間に20～50個と思われますが、17～19日の夜半から夜明けまでの間に、散発的に出現が見られるかもしれません。
流星の観測には、街灯の明かりが少ない、見はらしのよい場所が観測にむいています。
また、夜は意外と冷え込みますので注意してください。